

1

次の世代に残していきたい資源(ヒト・モノ・コト)に焦点をあて、そのものの見方や関わり方を愉しみ、今の社会に新たな視点を取り入れてみる本テーマ。今回、建築家 西村伊作の数々の建築活動と時間を越えて現在に残る貴重な住宅資源について、川島先生にご執筆いただいた。

阪神間モダニズムの先駆者・西村伊作とその作品

-西村建築会社社屋と前田慶治邸-

執筆: 建築史家・神戸情報大学院大学・大手前大学

川島 智生

京都工芸繊維大学大学院博士課程修了 博士(学術) 一級建築士 神戸市在住

近著に『近代日本の小学校建築史—鉄筋コンクリート造校舎の成立と展開』(中央公論美術出版 2024年)、『戦後モダニズムの学校建築』(鹿島出版会 2024年)、『近代神戸の小学校建築史』(関西学院大学出版会 2019年)、『宝塚温泉リゾートの建築史』(関西学院大学出版会 2022年)、などがある



はじめに

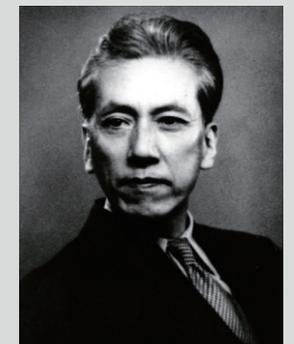
大正10(1921)年10月に武庫郡御影町にひとつの建築事務所が誕生する。西村伊作がつくった西村建築事務所である。阪神間ではきわめて早い時期に設けられた建築設計事務所であり、約50棟の住宅を阪神間で設計したと伝わる。特定される住宅は11軒である。西村伊作は生涯に140軒前後の建物を建設していたことを考えると、阪神間での作品のウェイトは高い。大正期の阪神間において、ひとつの建築事務所による設計としては最多である。判明した12軒は大正10年から昭和2(1927)年頃までの約7年間という短期間において設計されていた。この時に建設された建物は残念なことにひとつも残っていない。水害、戦災、震災とこの地を度重ね襲った災害ならびに都市化による土地の細分化によって、早い時期に消滅した。だが六甲山を越えた三田の地に一軒の住宅が現存する。大正15(1926)年6月に完成した前田慶治邸である。

前田邸は現在も曾孫一家が居住する個人住宅であり、非公開である。西村伊作の作品であるとの認知度はそれほど高いものではない。また三田は地理的に阪神間の範疇でなく、たとえ西村伊作の設計であることが知られていたとしても、阪神間との関係性は希薄である。さらに西村伊作は文化学院の創立者の「文化人」というイメージが強く、建築家であったことを知る人は多くはない。西村伊作は大正期より一般人向けの住宅についての著作『楽しき住家』をはじめ計5冊刊行しているが、「住宅建築の趣味人」との認識にあって、建築全般に対する専門家ではなかった。

実際に設計し完成した住宅作品としては、近年国重要文化財となった新宮市にある自邸ひとつが知られるにすぎない。しかし詳しく探れば、その作品は東京都から川崎市、茅ヶ崎市、軽井沢、東海市、新宮市、三田市、倉敷市、と全国各地に今も現存しており、けっして無視することができないものである。実際西村伊作はわが国最初の住宅作家のひとりであり、建築スタイルを主軸としたのではなく、「生活改善」の立場から使い勝手を重視した建築家であった。

本稿では現存する前田慶治邸ならびに、偶然二十数

年前に入手した西村建築株式会社の『建築案内』を手掛かりに、前田邸ならびに阪神間にあった西村作品について論じる。このような試みはこれまでの阪神間モダニズムから抜け落ちていた視角である。西村伊作みずからの自伝『我に益あり』(1960年)には断片的ではあるが、関連事項が書き連ねてあり、ここからもその一端を読み取ることができる。



西村伊作

さて前田慶治邸の現地調査で棟札が屋根裏から今回発見され、建設体制の一端が判明した。前田邸には西村建築事務所の設計図の複写が保管されている。『建築案内』は大正15年の改組の際に刊行されたものとおもわれる。ここには阪神間に建設された多くの住宅が紹介される。筆者は住吉の西村建築株式会社の専務取締役で技師長を務めた榎本淳一の遺族、向井五美氏への聞き取り調査ならびに向井邸での文献調査を実施し、写真や図面、手紙などの新発見をおこなった。先行研究としては田中修司氏の「西村伊作の研究」(東京大学学位論文 1998)がある。

1. 西村建築事務所

1) 西村建築事務所の誕生(御影)

なぜこのように早い時期に兵庫県旧武庫郡御影町に建築事務所が設置されたのか。そのことを西村伊作は自伝『我に益あり』のなかで次のように記す。

「その新聞の記事が出ると、新しい住宅の開拓者のように扱われて、建築の設計をいろいろな人から頼まれた。そのために私は技術者を雇って建築事務所を建てた。事務所は初め大阪と神戸との間に設けて、大阪、神戸の郊外の人の住む住宅をおもに設計した。」

ここでいう新聞とは大正9(1920)年に西村伊作が大阪毎日新聞に十日ほど連載した「私の文化生活と住宅」(8月12日から20日)である。「文化村」が平和記念東京博覧

会のなかで披露されたのが大正11(1922)年であり、その2年前にこのような提案がなされていたことは興味深い。建築専門用語を用いない平易な言葉で文化生活的なかでの住宅のありようが語られており、大きな評判となる。そのことを受けて、翌大正10年10月に建築事務所が御影に設立される。

この時期住吉や御影、芦屋では別荘や郊外住宅が競い合って建設される時期にあり、後述するが「会社は日本に於ける最も住宅の発達したる阪神間に置き」とあるように、住宅地という点で阪神間は東京を凌駕する先進地となっていた。その当該地のひとつである御影が選ばれ設けられることとなる。西村伊作が居住する新宮からの交通路を考えると、この時期は神戸・大阪と紀伊勝浦を結ぶ大阪商船の定期航路があり、西村伊作は頻繁に訪れ、事務所が宿泊所を兼ねていたものとおもわれる。おそらくはスタッフはここに常駐していたのだろう。バンガロータイプの平屋建ての建物であった。

事務所設立については大正12(1923)年6月に刊行された『明星の家』の末頁に付けられた「私の建築事務所」の紹介文からもその経緯がうかがえる。

「これまで、私が新聞、雑誌へ出した文章や著書などによって、建築のことを私に御相談下さる人が沢山あって、私は建築事務所を開かねばならなくなりました。私は自分の出来る事で何か人のために働く事が出来るならば、私の生活は幸福だと思ひます。今迄、既に東京、大阪、神

戸等の各地に数十軒の建築を完成し、或は施行中です。私の建築事務所は現在、東京と御影町の各地に技術者を置き、一般建築の設計監督及び施工を致します。」

ここからは御影にくわえて二年後には東京にも拠点が設けられていたことがわかる。東京の事務所は駿河台袋町の文化学院の中であった。遡る大正10年に西村伊作は東京での拠点として文化学院を創立しており、この年7月には一家あげて新宮より移住していた。建築設計体制は御影と東京の二ヶ所でおこなわれることとなる。ただ9月には震災に遭遇し、完成まもない文化学院校舎が全焼する。

2) 西村建築株式会社への改組(住吉)

大正15(1926)年3月には西村建築事務所は西村建築株式会社に改組される。『帝国銀行会社要録:附・職員録』(大正15年版)によると、資本金12万5千円で、社長が西村伊作、専務は榎本淳一、役員は網本庄太郎・南谷千代吉、監査役は大島虎之助・西薮嘉八とある。所在地は武庫郡住吉村大蔵1417番地であった。土木建築を目的とした設計と施工の会社にかわる。この時点で本社屋は御影から住吉駅前に移転していた。その時期は特定できないが、大正13(1924)年中であったとされる。この建物は駅より南側の東西に走る阪神国道の南側に位置した。この建物のことは後に詳述する。正確にいえばその南側に南北に走る住吉幹線の東側にあり、現在くろいわ整骨院がある場所にあった。すぐ南には住吉小学校があり、現在も同位置である。

西村建築株式会社への改組については同年7月に刊行された榎本淳一著の『住宅建築の手引』の末頁に「建築の設計及び施工」との紹介があり、以下記す。

「西村伊作氏の趣味と研究とに依る西村建築事務所の事業が世の有識者間に好評を博し漸次に発展致しましたので、今回その組織を更め西村建築株式

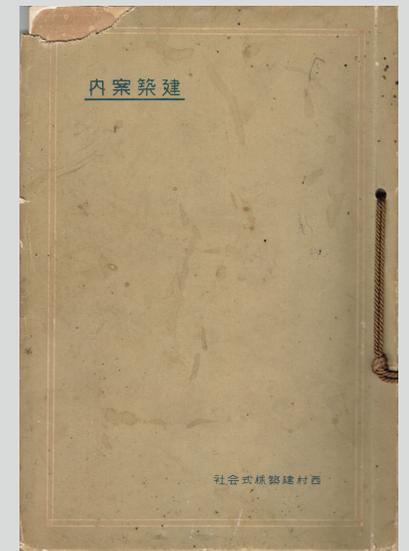
会社として益々新日本建設の為に奉仕致すこととなりました。数年間の経験とその成功と失敗とに鑑み、其結果今日は以前よりも完全に、そして経済的に工事を完成すが出来るやうになりました。株主は全部今迄数年間出入した職工及材料供給をもって成立し、最も堅実にて西村氏の建築を理解する者のみの集まりであり且つ社長は西村伊作氏で、今後も従前通り責任をもってすべての設計図案を自らする事になって居ります。会社は日本に於ける最も住宅の発達したる阪神間に置き、静かに、そして費用のかからぬ経営をして落着きのある、そして無用の工費の要らぬ建築を致して居ます。会社であります。が、営利本位の会社としてでなく、芸術家のアトリエの気分を以て働いて居ます。」(傍点は筆者による)

同年西村伊作は東京阿佐ヶ谷に自邸を建てる。翌昭和2(1927)年12月には新宮を引き払い一家で阿佐ヶ谷に移り住む。同年西村建築会社は東京出張所を銀座四丁目に置く。いつまで住吉に社屋を構えていたのかは定かではないが、徐々に東京にシフトしていったものとおもわれる。住吉村に所在が確認される最後の時期は『帝国銀行会社要録』第23版(昭和10年)によると、昭和10(1935)年である。西村建築株式会社は『官報 1937年7月16日』によると、昭和12(1937)年3月21日にそれまでの役員・監査役のメンバーを大きく変更する。榎本淳一・西薮嘉八・網本庄太郎・南谷千代吉の4人は辞任し、西村伊作・大嶋虎之助・西村永吾の3人が取締役、西村久二が監査役の体制となる。所在地は東京市麴町区内幸町一丁目七番地 幸ビルヂングに移る。すなわち東京に全体が移転し、住吉はこの頃に閉鎖される。翌昭和13(1938)年には住吉川が氾濫し大洪水となり、駅の南側にあった旧本社屋も洪水で被災するが、耐えた。が、昭和20(1945)年の空襲で焼失した。

昭和になってからの西村伊作作品については定かではないが、住吉村を拠点とした仕事は活発だった大正期に比べれば減少していたようだ。昭和4(1929)年の段階では西村伊作が取締役を務めた「理想郷住宅株式会社」が奈良県生駒町に設立されていた。翌昭和5(1930)年6月1日付けの『大阪朝日新聞』の記事「理想郷住宅株式会社経営地:優美と雄大!!関西の軽井沢:大和の国生駒山腹:大軌沿線に出現した高級住宅地・新住宅続々施工落成」によれば、見本住宅として西村伊作の設計によって麗人荘と霊山荘の二戸が建設されていたことがわ

かる。西村伊作は山腹の住宅地計画にも関わっていたようだ。

だが西村伊作は昭和一桁台後半には建築に対する関心を失っていたと吐露しており、昭和8(1933)年の



『建築案内』西村建築株式会社

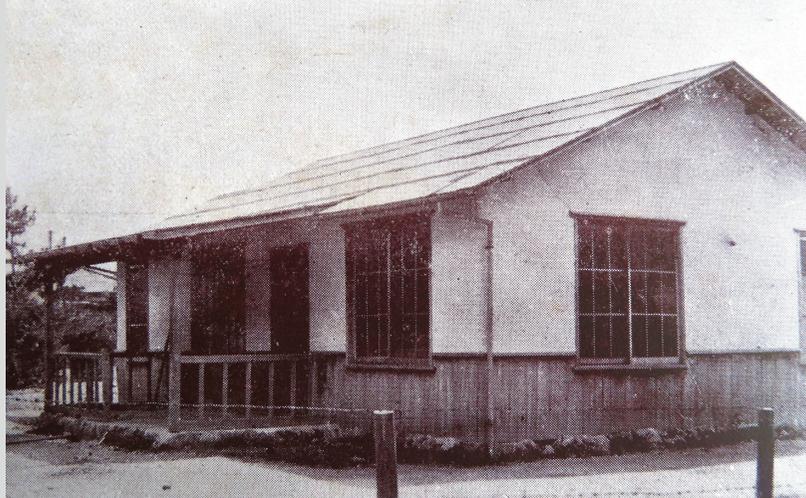
東京五反田の池田山の自邸の設計は西村伊作ではなく、息子の久二が担った。昭和16(1941)年には同社は文化学院内に移っていた。

3) 建設体制

「有産階級の建築道楽」者の西村伊作は建築教育を受けておらず、建築家としての修業もしていない。そのような意味ではアマチュアであったが、どのようにして設計をおこなっていたのだろうか。洋行と欧米から輸入した建築雑誌によって独学したことは知られるが、西村伊作を建築家に育てた一番大きな要素はみずからのアイデアでもって、自邸を三度にわたり建設した経験であったと判断できる。そこで設計と施工の方法の一端を習得したに違いない。ただし普請全体をひとりで担えたわけではなく、そのために建築教育を受けた建築技術者が雇われる。当時は高等教育を受けた技術者はきわめて少なく、西村伊作は中等教育を学んだ技術者を数名雇う。そのことは前述の自伝のなかの「そのために私は技術者を雇って建築事務所を建てた」ことに示される。

西村伊作自身は製作の過程を次のように記す。「建物の図案をしてそのスケッチを同氏(榎本淳一)に渡すと、彼は黙々として構造のこと、強弱のこと、材料のことなど考へて、私の考へた感じを損はぬやうに細かく設計し、製図し、平和に職人を使ひ、一つ一つ建物を完成するに

西村建築事務所(御影)



努めました」(『住宅建築の手引』の序文、なおかつは筆者による加筆)。すなわち、西村建築事務所では外観スケッチと間取りを西村伊作がフリーハンドで描き、スタッフに渡し図面化して設計図をつくり、工事にかかるという進め方を取った。

西村建築事務所のもうひとつの特徴は設計のみならず施工もおこなっていた点にあった。その方法は直営であり、「下請制度をやらずに職人の各自専門な仕事を部分々に請負わす事にしています」(『住宅建築の手引』)とある。大工の多くは新宮周辺の出身者であった。

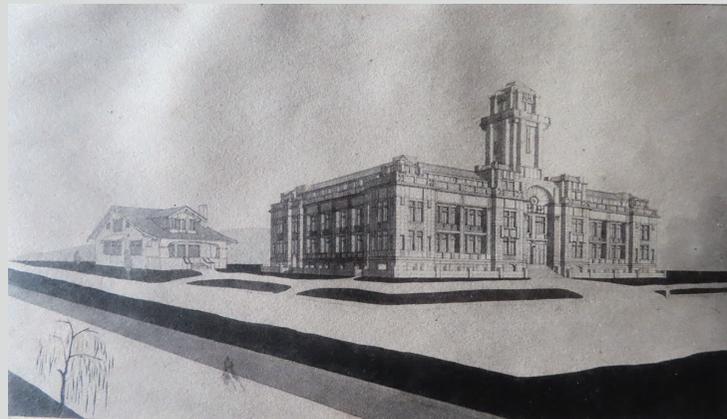
西村建築事務所には二人の中等教育を受けた建築技術者が在籍しており、ひとりには榎本淳一、もうひとりは大嶋虎之助であった。この二人の技術者をみていく。田中(「西村伊作の研究」その3)によれば、榎本淳一は御影・住吉で活動し、大嶋虎之助は新宮と東京で活動したという。筆者は二〇二五年一月七日に周参見町江住で榎本淳一の五女の向井五美氏に聞き取り調査を実施している。



図面の表題

4) 榎本淳一

榎本淳一は大正10年に御影で開設された西村建築事務所の創設メンバーであり、その経歴は明治29(1896)年12月25日に和歌山県東牟婁郡下里町粉白(現、那智勝浦町)に宮大工の息子として生まれ、当時日本有数の名門工業学校であった大阪市立工業学校建築科(現都島工業高校)を大正6(1917)年に卒業する。この年の卒業生24名の顔写真と卒業設計案が記された卒業記念帖があり、榎本淳一の卒業設計には歴史様式にもとづく公館とともに一軒の洋風住宅が描かれる。ここからはすでに



榎本淳一による卒業設計

この時にこのような住宅に対する指向があったことがうかがえる。卒業と同時に大阪の住友総本店臨時建築部(後に日建設計)に入る。そこで関わった仕事のひとつが判明しており、大正8(1919)年に中国の青島病院新町分院の設計と現場監理を担当していた。



榎本淳一



青島病院新町分院

榎本家に残る経歴書(昭和21年10月20日)によると、同年10月に住友総本店を退職し、西村建築事務所に奉職とある。大正9(1920)年3月に同事務所に入所という説もある。いずれにせよ建築事務所として設立していない時期の入所ということからは事務所を立ち上げた最初からのメンバーであった。

なぜ将来性のある住友臨時営繕部を辞めて西村事務所に入る決意をしたのだろうか。榎本淳一が西村伊作の理念に感化されて事務所設立に関わったものとおもわれたが、実情は定かではない。西村伊作は前述したように住宅設計を具体化する建築技術者を探していた。

その際に地元で長く大工棟梁をつとめた榎本淳一の父が西村伊作と何らかの親交があった可能性もある。実際に西村事務所では施工に関して、阪神間や倉敷、東京であっても大工たちを連れて行っていることを考えれば、南紀州に根付いた大工たちのネットワークがあったものと判断できる。新宮周辺出身という地縁のなかで、建築の専門教育を受け、設計の実務能力があり、しかも年齢が一廻り若くて使いやすいくということも榎本淳一は選ばれたのではないだろうか。ちなみにこの時期は二十代前半であった。

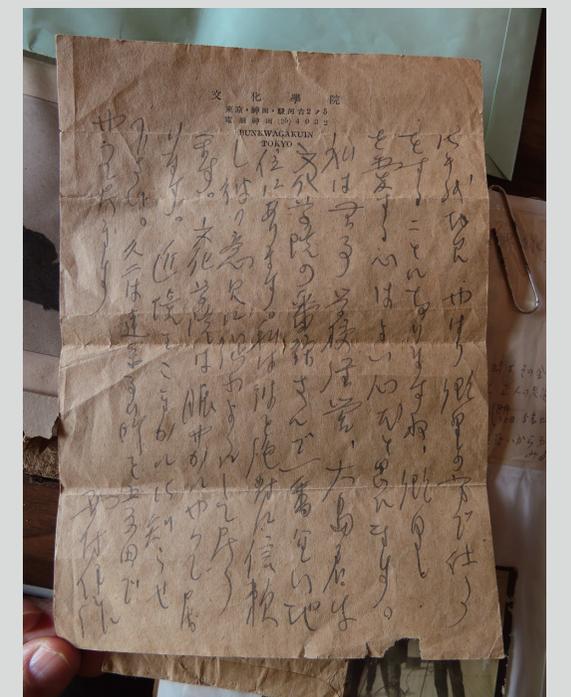
榎本淳一は最初から西村事務所技師長であった。ということからは設計できる技術者として年長者はいなかったものと判断できる。西村作品の多くの建物は榎本が技術的なサポートして貰ったものであった。

榎本が著した『住宅建築の手引』では洋風住宅の意味ならびに施工について実務的観点から紹介していた。住吉の西村建築会社の本社屋は事務所と住宅の併用建築であり、榎本は責任者として家族で住み込み、建築活動に邁進した。昭和6(1931)年には一年間渡米し、アメリカの建築を視察している。責任者が一年間も日本を留守にすることは一般的には考えにくいがおそらくは仕事に翳りが生じ、閑になりつつあったことが関連していた可能性もある。昭和12(1937)年3月までに西村建築会社は住吉での活動に終止符を打ち、東京へ全面移転する。榎本はその際に同社を退職している。

なぜ住吉で会社が継続できなかったのか。史料的制約のため詳しくはわからないが、大正期とは異なり、昭

和一桁台後期以降は同業の建築事務所や住宅会社が急増し、従来のような独占的な立場ではなくなっていたことが関係するのだろう。

そのことと関連する西村伊作からの手紙が榎本淳一の遺族宅に残っている。正確な年月日は定かではないが、文中に五反田での建築事務所とあることから昭和8年以降のことで、住吉での西村建築会社が消滅する昭和12年までの間であると推測される。榎本淳一は西村伊作に手紙を出していた。おそらくは故郷に戻って仕事をする相談であった。つまり住吉での仕事の受注がかんばしくなく、経営が立ちゆかなくなったことが背景にあったことが関連する。以下その全文を紹介する。



榎本淳一宛の西村伊作からの手紙

「御手紙拝見、やはり郷里の方で仕事をする事になりますね、郷里を愛する心はよい心だと思ひます。私は無事学校経営、大島君は文化学院の番頭さんと一番尊い地位にあります。私は彼を絶対に信頼し彼の意見に従ふようにして居ります。文化学院は賑やかにやつて居ります。近境をこまかに御知らせ下さい。久二は建築事ム所を五反田でやつて居ます。西村伊作」

だが故郷での仕事はみつからず、満州にわたることと

なる。大正9(1920)年を出発点とすると、約17年の間勤めた。その年渡満し大連、翌年には鞍山で建築活動をおこなう。石井組鞍山出張所主任として昭和製鋼所の各工事を担った。石井組は昭和18(1943)年に城興土建株式会社に改組し、取締役役に就任する。昭和21(1946)年9月に帰国し、故郷に戻り新宮市の旭建設に勤め、1950年代から60年代にかけては南紀州の旅館やホテルの設計に携わった。昭和45(1970)年1月17日に故郷の下里町白の家で72歳で死去した。

5) 大嶋虎之助

もうひとりの技術者、大嶋虎之助も最初からの創設メンバーである。その経歴をみると、榎本と同年生まれで、共通して和歌山県南部の出身であった。大嶋も榎本も年齢は西村伊作とは一回り下にあたる。大嶋は大阪府立職工学校造家科(現西野田工業高校)を大正2(1913)年に卒業し、余所で修業した後、西村事務所開設に伴い入所した。榎本と同様に西村伊作の思想に感化されたひとりであった。昭和3(1928)年に西村伊作の東京移住に伴い、住吉から上京し文化学院の事務長を務める。また昭和12(1937)年以降も引き続き取締役を務める。

前田慶治が41歳の時に建設された。朝鮮では子どもに十分な教育ができないと考え、妻子を故郷近くの三田に住ませることとし、普請に至った。建設費は設計料を含めて2万円であった。設計を西村伊作に依頼した経緯は知人を介して頼んだと伝わる。



前田邸の全景

株式会社前田農場は昭和8(1933)年11月に全羅南道高興郡高興面王下里208に設立される。『躍進朝鮮大観』(帝国大観社,1938)によれば、代表取締役は前田慶治、監査役に小川嘉壽太、とある。前田農場は500人の小作人を擁した。その土地は「地味ハ概ネ中等以上デ穀物、蔬菜ノ栽培ニ適スル。気候ハ温和デ朝鮮中稀ニ見ル凌ギ良イ所デアル」(『新編朝鮮地誌』朝鮮弘文社,1924)とあり、海洋性気候ゆえに農業に適した。

この農場のあった場所は「朝鮮多島海で無数の大小島嶼が基布し」た半島の町であり、『最新朝鮮地理』(京城日報社代理部,1918)によれば、高興郡には内地人は739人居住しており、朝鮮人は87,701人であった。尼崎汽船が内地と麗水間を月に二回連絡しており、行き来に不自由はなかったという。前田慶治は昭和15(1940)年12月16日に三田で死去している。55歳であった。

2) 棟札

この建物の建設陣容は見出せた小屋組の棟札より判明す



棟札(撮影 前田渉)

る。この棟札は横長の板であり、建設工事に関わった9人の名前とその出身地が詳しく墨書きされる。右端には「大正十五年六月上旬」とあり、おそらくは棟上げの時期を指し示したものであろう。一方左端には「大正十五年九月十五日 成功」とあり、竣工のことを記したものとおもわれる。この間に関係者たちの氏名が記される。

右からみると、「元請負 兵庫県武庫郡住吉駅南 西村建築株式会社 監督者西薮嘉八 四十八才」。次は「大工棟梁 和歌山県東牟婁郡佐野の升原春一 三十三才」。ここから左側には七人の職人の氏名が記載される。三重県南牟婁郡の「仲屋九右衛門 三十才」、三重県南牟婁郡有馬の「山川亀三 三十一才」、同じく「田中実雄 三十才」、和歌山県東牟婁郡田原の「東山元吉 三十五才」、和歌山県東牟婁郡太地の「龍平八郎 二十四才」、和歌山県東牟婁郡下里の升原の弟子「田崎安彦 十九才」、兵庫県有馬郡三田町の「有賀源三郎 三十八才」となる。ここからは西薮嘉八と有賀源三郎を除けば、和歌山県新宮周辺の大工たちによって普請が担われていたことがわかる。船で神戸にやってきて、現場で半年ほど建設工事に携わったものとおもわれる。

このように職人のひとりひとりの名前までも記されることは少ない。いかに西村建築株式会社が職人を大事にして、仕事をしていただけたかがうかがえる。

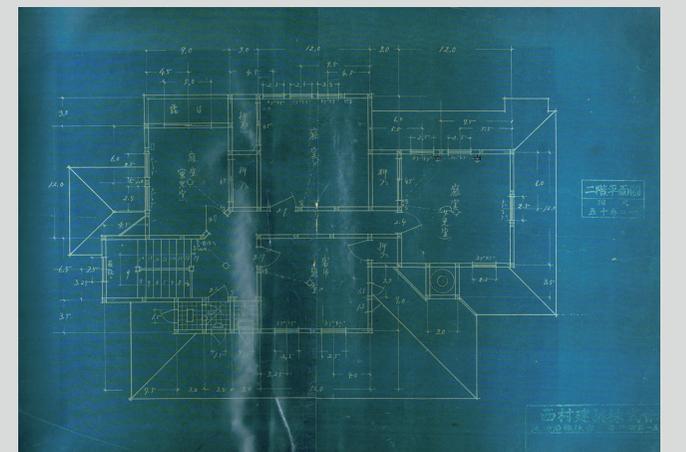
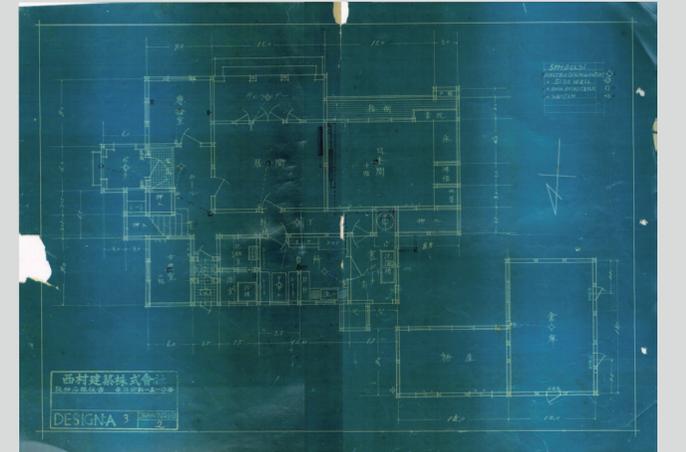
3) 図面

この建物の建設当初の設計図が残っており、前田家にはその複写がある。枚数は20枚ある。この設計図はメートル法ではなく、尺貫法で寸法線が記されている。図面の名称と縮尺を以下にする。なおのうち設備関係の2枚は建築設備関連で有名な須賀商会の設計であった。

配置図1:100、1階平面図1:50、2階平面図1:50、正面建図1:50、側面建図(南)1:50、側面建図(北)1:50、裏面建図1:50、地形伏図1:50、2階床伏図1:50、小屋伏図1:50、断面図(横)1:50、断面図(縦)1:50、玄関入口詳細図1:20、階段詳細図・

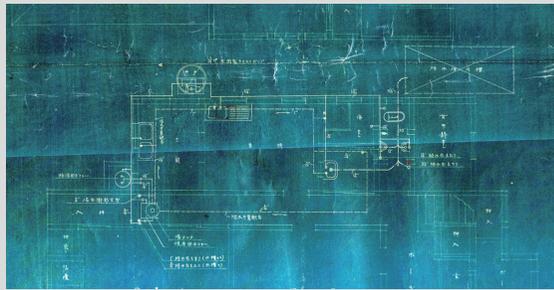
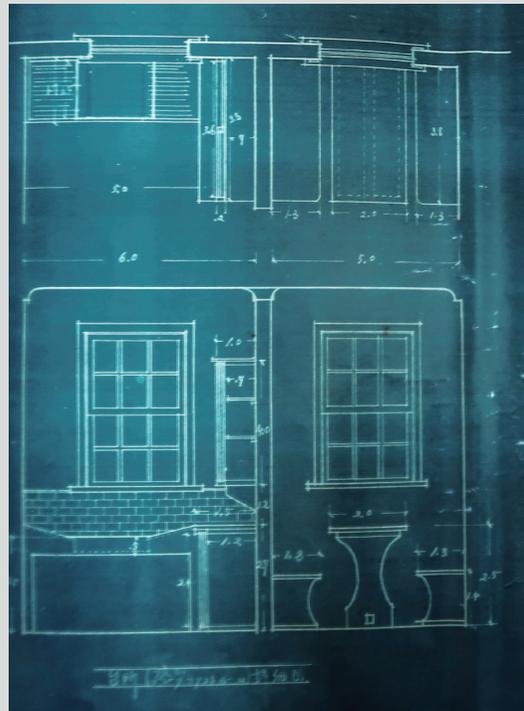
女中室矩形図1:20、台所ブレイクファストルーム・流し詳細図1:20、浴室及び台所などの窓・出入口の額縁原寸1:1、上げ下げ窓原寸図(平面)1:1、上げ下げ窓原寸図(断面)1:1、給水給湯衛生工事配管図1:50、温水暖房装置設計図1:50

写真上:1階平面図、写真中央:2階平面図、写真下:南面図



前田慶治の実家の庭園を設計した橋本八重三(『植木屋の裏おもて』六合館.1930)によれば、実家は日本式庭園であったという。橋本は橋本庭園工務所を大阪で営んでおり、三田の前田邸の庭園計画をもおこなっていたとおもわれる。ただ前田家に所蔵される橋本の署名のある図面は南側をより広くとり、現在のものとは異なる。また現在の丸い小さな池は記されていない。したがってこの図面は現在の庭園に至る前のプランであったとみることができる。

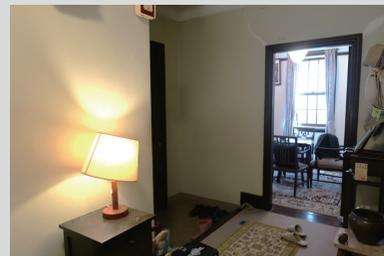
写真上:台所平面図・展開図、写真下:温水暖房装置設計図



給水給湯衛生工事配管図

4) 平面

玄関はポーチの内側の奥まった位置にあり、扉の脇には腰掛け用のシートがニッチ(壁龕)のように壁のなかに



玄関ホールと応接間

掘り込まれてある。玄関自体は狭いがホールと一体化して設けられ、コンパクトにまとめられている。そこは応接間や階段の上がり口を兼ねた動線の交差点となる。

掘り込まれてある。玄関自体は狭いがホールと一体化して設けられ、コンパクトにまとめられている。

プランは東西に細長い中廊下式になっており、玄関を入ると、すぐ脇に四畳半の応接室がある。西村伊作の住宅では応接室を設けることが少なかったが、ここでは取って設置されていた。施主側の要望に応えたものとおもわれる。椅子やテーブル、入隅用の三角形平面のキャビネット(飾り棚)も昔のままにある。西村伊作の住宅にはほとんどで設置がなされていた暖炉はここでは設けられていない。したがって大きな煙突がないことも特徴のひとつとなる。

玄関ホールの中廊下側には上階へつながる階段が設けられ、その奥に三畳の女中室がある。中廊下に沿って連続するのは居間と日本間である。ともに十畳の広さがある。居間にはヴェランダが前面に付くがこの部分には天井(2階の寝室)があり、両側には壁があり、吹き放ちであったが奥行きが6尺ある、いわば囲われた空間となっていた。現在は建具が嵌まるが、当初の設計図では

吹き放ちであったことがわかる。今も置かれているソファは建設当初からあったものである。日本間は西側に床の間と仏壇を設け、南側は縁側となる。この室は茶の間として使用されていた。

中廊下を挟んで北側は水廻りとなる。居間の北側は台所であり、流しと釜戸が設けられるが、造り付けのテーブルと向かい合わせに木の椅子(図面では「シート」という表記)が設置されていたことは特筆に値する。コンパクトでありながら、シンクとの間には壁が設けられ、一種アルコーブのような半独立した形となっていたが、現在は撤去されている。慶治氏の孫・義人氏によれば、朝・昼・夜の食事はここでおこなわれていたという。井戸は台所シンクの壁の外側に壁に囲われて設けられ、現在も使用されている。ちなみにこの時期三田町では上水道は引かれていないために、井戸水に頼った。

台所の西側には土間になった裏ポーチがあり、勝手口の役割を果たしていた。現在は台所が延長されてこの部分は板張りとなるが、そこには洗濯槽があり、その奥には



写真上:1階居間、写真下:1階和室

暖房用ボイラーと湯タンクが設置されていた。石炭を焚いてボイラーでお湯が沸かされ、1階の居間、2階の寝室と客寝室に備わったラジエーター(放熱器)に通すシステムとなっていた。温水暖房装置設計図にそのことは明記される。

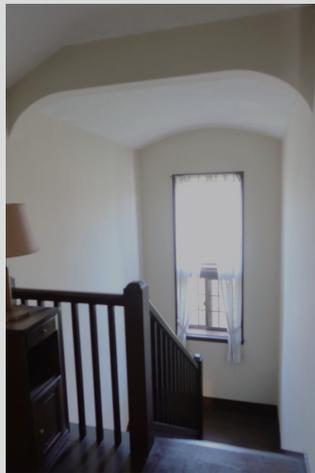
裏ポーチの西側壁の外側にはボイラーがもうひとつ設けられ、台所のシンクや浴室、洗面所、さらに2階の洗面所にお湯を通した。給湯用ボイラーである。

便所は水洗となり、汚水浄化槽が敷地内に設けられていた。おそらくは三田では最初の水洗便所であった可能性がある。2階の便所も水洗であり、小屋組に給水のタンクが設けられていた。このような設備装置の設置は生活改善を主眼とする西村伊作の理念の反映とみることができる。

2階にむかう。その階段の勾配はゆったりとしており、ヴォーリス設計の住宅ののほりやすさと共通する。階段を折り返す位置にある踊場は片持ち梁で外壁面より突



写真上:2階寝室、写真下:2階客用寝室



2階階段

出し、その下部には5本の出梁が突出し、野趣の意匠をあらわす。

2階もまた中廊下式の室配置を示す。全部で4室あるが、すべて洋室となる。現在は男児寝室のみが畳敷きとなる。北側にある客用寝室以外の3室は南面する。階段を上がった

場所にある男児寝室からみると、廊下に接する出隅が45度に掻き取られており、中廊下との動線計画を考えてなされていた。このように西村伊作は形式よりも実用本位に部屋の配置をおこなっていたことがうかがえる。この室には南側がベランダ(露台)となっている。

西隣の夫婦寝室、そして奥が女児寝室となる。ともに8畳の広さとなる。北側の客用寝室は6畳の広さとなる。その横階段側に洗面と便所が付く。女児寝室の北側には外壁より外側に凸状に壁がまわる。ここは暖房用ボイラーならびに湯タンクの給湯用ボイラーの煙道となっており、現在は撤去されたが、当初は屋根上に煙突が設けられていた。

5) 外観意匠

外観の特徴は次の5点があげられる。



階段室の外観と片持ち梁

第一は玄関ポーチの横の階段室が二層分立ち上がり、切妻破風を強調したスタイルをみせることである。この建物はこの部分以外は寄棟屋根となるなかであきらかにこの部分を建物の顔と考え、デザイン操作したものとい

える。正面側にあるためにファサード全体を統治したかのような感がある。このような妻壁を強調する手法を西村伊作はほかでもおこなっているが、階段室だけで完結させた事例はめずらしい。

二点目は外壁開口部でのアーチの使用であり、居間の元ヴェランダと玄関ポーチ廻りに用いられている。元ヴェランダの外壁面に三連アーチで開口部となる。その上階は呼応するかのように三つの窓が嵌まる。玄関ポーチでは正面東側と南側の二方向にアーチ状開口部が穿たれる。アーチ形はポーチ奥のニッチ状の椅子の上部にも用いられており、あきらかにアーチへの偏愛がみてとれる。全体的にイタリアン・ビリア風の影響がある。

三点目は屋根が和風色濃いものになっている点であり、釉薬のかかった茶褐色の棧瓦と鬼瓦・降り鬼が用いられている。褐色の棧瓦の採用は天然スレート葺きが多い西村伊作の作品ではめずらしいものであり、建設当初は塩焼棧瓦であった可能性もあるが、仕様書が見出せておらず不明である。鬼瓦や降り鬼が設けられることで、屋



写真上: 南面外観、写真下: 玄関ポーチ

根は和風意匠の印象を高める。西村伊作の作品では他に類例がなく、そのような意味で興味深い。和風瓦の採用は施主側による要望があったのかもしれない。暖炉が設けられなかったことによる煙突の不在も洋風色の希薄化につながっている。ただし形は不明だがボイラー室の煙突が屋根上にかけては立ち上がっていた。

四点目は外壁の仕上げと窓などの開口についてであり、外壁はスタッコやセメント、漆喰などによる大壁仕上げが用いられる。窓はすべて上げ下げ窓となり、中には鉄または鉛の分銅のおもりが入っている。1階の窓には装飾の付いた両開きの雨戸が図面では付けられていた。和風の屋根に対して壁は洋風スタイルとなる。

五点目はアーツ&クラフツ運動の影響の意匠であり、基礎と片持ち梁にみられる。基礎はすなわち足元の仕上げ材料

であり、野石を用いることへのこだわりのある西村伊作らしく、ここでも野石積みとなる。六甲山系の御影石で丸くなったものが使われている。片持ち梁については前述したように階段室の踊場を支えるものであり、当初は木部あらかしであったものとおもわれる。1.5尺(0.45m)外壁より、突き出す。また道路との境界の塀を支えるコンクリート柱の足元がスカートの裾のように外側にカーブしており、意識的にデザインされていたことがわかる。



基礎の野石積

6) 内部空間

一方内部空間をみると、和室だけではなく、すべての洋室において小壁に長押が廻る形式となる。詳しくみると、1階は9.0尺(2.73m)、2階は8.2尺(2.48m)の天井高さとなる。1階の居間は長押の上端までの高さは7.8尺(2.36m)で、小壁の高さは0.35mあった。一方、2階の寝室・客間・男児寝室では共通して長押の上までは鴨居より少し上の7.1尺(2.15m)の位置にあり、小壁の高さは寝室と客間は1.15尺(0.35m)、男児寝室は0.76尺(0.23m)となる。長押を境界に上は漆喰塗りで白色、下は黄土色となる。このように色彩を調整することで、落ち着きをもった空間となっている。さらにここでは共通して天井と小壁の取り付け部分に廻り縁は入らずに、左官による緩やかな曲面仕上げとなる。その結果視覚的に洋室特有の固い印象ではなく、やわらかい室内空間が誕生することとなる。



客用寝室の曲線の天井と長押

この住宅は西村伊作の住宅のなかでは小規模なものであり、華麗な洋館ではなく簡素なものであるが、以上みてきたように西村伊作の建築理念は細部にいたるまで反映されており、住み心地を第一に考えた住宅になっていたといえる。建築スタイルでは屋根は和風、壁は洋風となるが、広義の意味でイタリアなど南欧の建築様式の影響下にあったとみられ、それは西村伊作の好んだスタイルのひとつであった。

3. 阪神間における西村伊作の住宅

阪神間では御影町、住吉村、魚崎町、精道村(芦屋)、大社村(香櫨園)の5町村で確認される。判明した12軒を『建築案内』、『住宅建築の手引』、新聞記事を手掛かりに検証する。

1) 御影

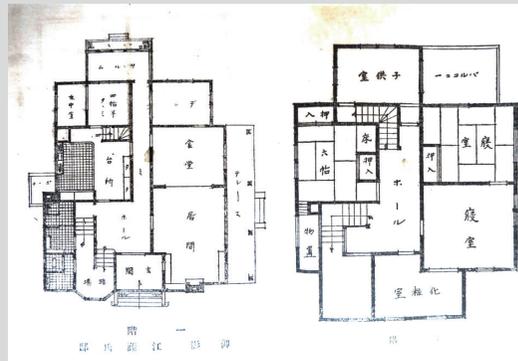
御影町には大正11年の江藤嘉吉邸(兄)、江藤治吉邸(弟)、喜多邸、建設年は不明の皆川邸の4軒があった。

江藤嘉吉邸は二階建てで切妻の大屋根が正面に付き、煙突が高く立ち上がる。背面には交差する切妻屋根が設けられる。プランは1階が玄関・ホール・居間・食堂・書斎・サンルーム・台所・裁縫室・女中室・便所・洗面・浴室・テラス、2階がホール・寝室・9畳の和室の寝室(小児寝室)・6畳の床の間付きの和室(老人室)・子供室・化粧室(更衣室)・バルコニー、屋根裏階は店員の寝室・物置・タンクからなり、ホールと主階段が中心に構成されていた。

特徴は二点あり、一点は中廊下式が採用されているが、その一部が広いホールになっていた点で、もう一点は応接間が設けられなかった点で、居間には暖炉が用意され応接間と兼用されていた。共に西村伊作の理念の反映である。階段は台所からあがる裏階段も用意されており、2つあった。畳の部屋は1階に1室、2階に2室あり、1

階は茶の間、2階は寝室と座敷であった。江藤嘉吉は大阪の貴金属商・尚美堂を経営し、キリスト教・同信会の信者であった。この建物は戦災で焼失した。竣工直後の大正12年1月5日付けの『大阪朝日新聞神戸付録』に「過渡期にある阪神間の理想住宅(上) 見本に先ず西村伊作氏の建築を挙げる 接客本位から家族本位」として紹介されていた。

同じ御影に弟の江藤治吉邸は同年に建設された。こちらはプランはなく、外観写真があるだけとなる。切妻破風の太屋根と煙突からなる外観は江藤嘉吉邸と共通する。玄関廻りには野石積みのアーチで縁取られる。車庫はハーフティンバーの妻装飾がみえる。戦後昭和25(1950)年に解体される。



左:江藤嘉吉邸・1階平面図、右:江藤嘉吉邸・2階平面図

御影町郡家にあった喜多邸はめずらしく石造2階建ての家であって、大正11(1922)年12月に発行の雑誌『明星』に「大形の石造の家」として紹介される。ここからは大正11年に建設されていたことがわかる。その構造は「荒石乱積造」とあり、石積みの背面、すなわち室内側は鉄筋コンクリートで補強されていた。東北の一角には日本座敷が設けられ、そこだけは木造となる。施主の喜多氏は外国にも住んだことのある「大きな商業にたずさわる紳士」であった。この時期東京麻布で西村伊作は石丸邸を建設しており、石造併用という意味では共通する。その他に御影には皆川邸があった。ハーフティンバーのファサードの2階建て建築であった。

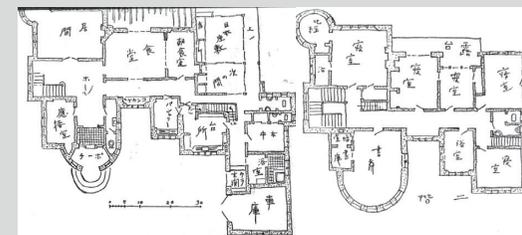
御影・江藤嘉吉邸



喜多邸正面



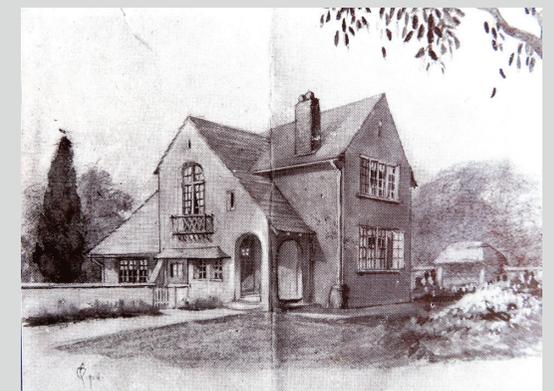
喜多邸側面



左・御影・喜多邸・1階平面図、右・御影・喜多邸・2階平面図

2) 魚崎

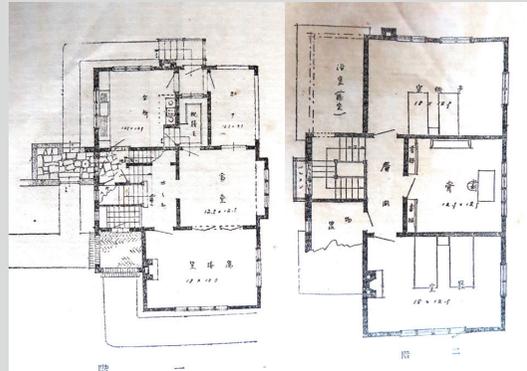
魚崎町には大正11年に建設された池原鹿之助邸の一軒が確認される。住吉川に面した河岸というロケーションにあって、めずらしく西村伊作のスケッチが残っている。



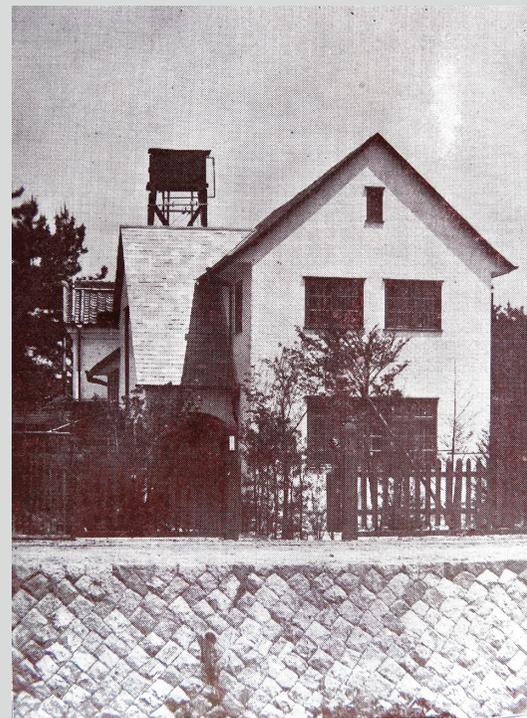
魚崎・池原邸スケッチ

ほぼスケッチのとおり完成するが、実際には高架水槽が屋根上に設けられていた。プランをみると1階は暖炉の付いた応接間・食堂・台所など、2階は暖炉付きの寝室・書斎・子供室からなり、この家には和室はなくすべて洋室からなった。ここでいう応接間は食堂とアコーディオンカーテンで区切られた部屋であり、居間とみること

ができる。池原氏は明治から昭和戦前期の実業家で、大阪市助役をはじめ藤田組理事を経て、日本水道衛生工事を設立した。



左・魚崎・池原邸1階平面図、右・魚崎・池原邸2階平面図



魚崎・池原邸

3) 住吉

住吉村には山口邸・濱田邸・山田邸・萩原邸の4軒が確認されるが、大正11年に建設された山口邸を除いては竣工年が不明である。山口邸は切妻破風をならべ、妻部は木の束をあらわしてみせる。濱田邸は切妻破風を左右対称にみせる外観を示す。



住吉・濱田邸の正面図

山田邸は切妻破風の大きな屋根をみせる意匠となる。萩原邸は平屋建て一部2階建てで、玄関廻りならびにベランダにアーチの開口が取られており、前述した前田邸に通ずる意匠をみせる。



住吉・萩原邸

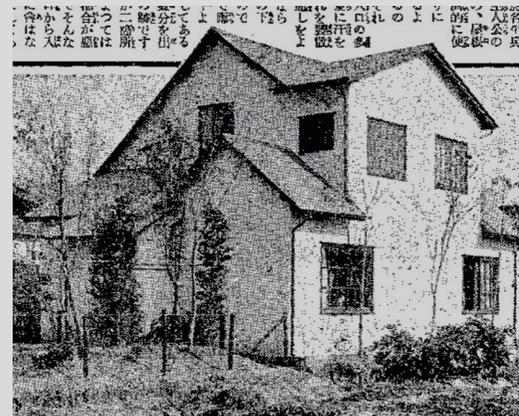
4) 芦屋・夙川

芦屋精道村(芦屋市)には総2階建ての外山邸があり、夙川(大社村)には八木正之邸があった。八木邸は大正12(1923)年1月6日付けの『大阪毎日新聞兵庫県付録』には、「現代人の住宅として選んだ三つの家」のひとつとして外観写真入りで紹介される。その解説として「建坪二十六坪余、居間兼食堂が南窓で明るく、この頃では温室に入ったように温かである。この室は台所にも、寝室にも便所にも、二階にも、洗面所にも、浴室にも家中のどこの部屋を通らなくても行けるのが便利な点である。(中略)日本間は洋館の中にいるという感じがしないのが特長です」とある。



香植園・八木邸

「現代人の住宅として選んだ三つの家」の二つ目選ばれた住宅も西村伊作の設計によるものである。夙川にあった二戸一住宅(セミ・デタッチド・ハウス)で、左右対称のプランであり、2階建てとなる。シンプルな外観を示す。一階には六畳と三畳、台所のほか、湯殿が設けられ、二階は四畳半と三畳からなつた。外観からは一軒の家の形を示すが、共同住宅であり、小規模な貸家でもあった。最後のひとつは御影にあった鳥名平兵衛邸であり、施主みずからの設計であった。ここからはこの時期いかに西村伊作の住宅作品が注目されていたかがうかがえる。



夙川・二戸一住宅

5) 住吉本社屋の事務所兼住宅

これまでは外観写真一葉しか見出せていなかった住吉本社屋について、今回見出せた設計図ならびに写真から、建築的分析を試みる。この設計図と写真は榎本淳一の遺族が所蔵するものである。

この建物は西側に向いて建てられており、正面の中央に玄関を設ける。二階建てで、外観の特徴はバラベットの柱形の笠木部分に、また玄関ポーチの屋根にスパニッシュ瓦もしくはS型瓦が載るといふ点にある。外壁は白く塗られ、木骨モルタル造であった。正面ファサードは玄関の部分だけが内側に2尺(0.6m)分控えて建てられたことで、垂直方向に三分割され、左右対称となる。その出隅部は四ヶ所にわたってバラベットの柱を突き抜けて垂直に立ち上がり、柱形を強調する。窓は比較的大きくとられており、二階の天井ふとりに換気口が開けられる。

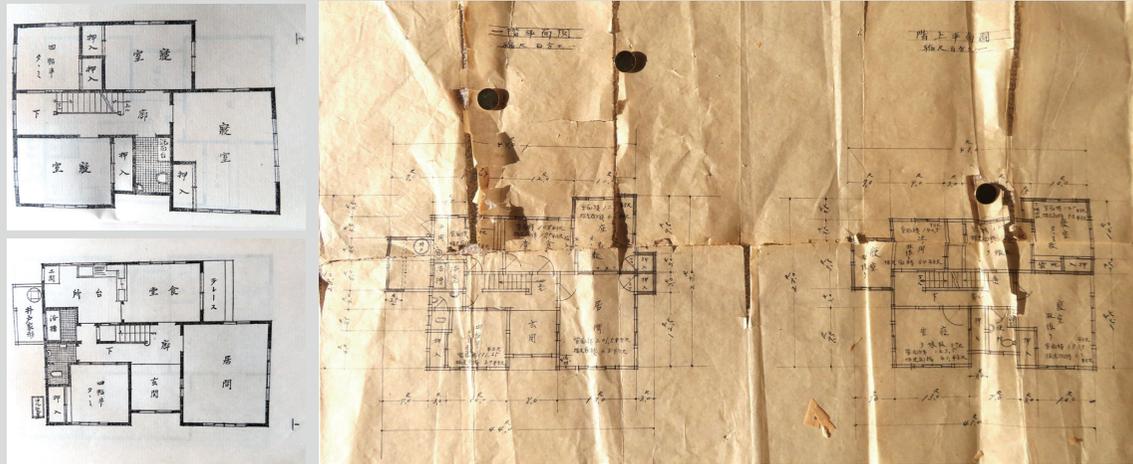
木造ゆえに屋上はないものと推測していたが、屋上で撮影した一葉の写真が見出せ、陸屋根になっていたことが判明した。また2階平面図の階段には「下ル」と「上ル」の表記がみられ、3階すなわち屋上階があることが読み取れる。



屋上

ここにあげる写真には榎本淳一の娘たちが写っている。右側には立ち上がったバラベットの柱が、左側には屋上にある階段の上屋ベントハウスがみえる。人物の背景には六甲山系が薄ぼんやりとひろがる。

間取りをみてみよう。ホール型プランであり、各室には他の部屋をとおらなくとも出入りできるようになっている。一階は玄関の正面に階段があり、その右側(南側)に10畳大の居間、左側(北側)に4畳半の部屋となる。階段の奥(東側)は食堂となり、その左奥は台所となり、流しがある。その一部は土間となる。その西側は浴室と便所となる。2階は四つの寝室からなり、部屋の広さに大小があったものの、いずれもが板張りとなる。玄関の上部は便



上:2階略平面図、下:1階略平面図

オリジナルの平面図

所となる。以上が建設当初のプランである。ここで注目すべきは、1階と2階にある四帖半の部屋が共に畳敷の和室になっていたことである。建築事務所の執務ならびに製図のスペースがどの部屋であったのかは定かではないが、おそらくは1階の居間が用いられていたものと考えられる。

ここにその後増築が計画される。実現したのかどうかは定かではない。図面では増築箇所の壁は暗色に塗り分けられており、1階と2階の両階にわたって増築がなされる。1階は居間の奥に座敷が設置され、土間の北側にあった井戸廻りに壁が付く。2階は1階の増築の座敷の上に畳敷きの寝室が設けられる。また北側の井戸の上に三畳板間の寝室が設置される。その結果2階には6の寝室が用意された。興味深い点は最初のプランではすべて洋室であったが、増築では1階と2階のともに和室が設けられていたことである。日常生活をおこなうにあたって畳敷きの部屋の方が使い勝手良かったことを示している。

ではどのように事務所として機能し、家族の居住の場になっていたのだろうか。玄関脇の居間か四畳半が事務所だったのだろうか。2階は家族のプライベートの寝室群であった。



西村建築会社(住吉)

6) 全国各地の住宅作品

西村伊作の設計作品は全国で140軒ほどあり、そのうち外観やプラン、所在地などが判明したのは70軒ほどである。東京府が16、兵庫県が14、和歌山県が13、岡山県が8、神奈川県・長野県・愛知県・奈良県の各県が2つずつで計8、三重県が1となる。おそらくは大阪や京都にも建設されていたものと考えられる。住宅のなかで現存するものは、新宮市の自邸とチャップマン邸、三田市の前田邸、東海市の久野邸、川崎市の妹尾邸、茅ヶ崎市の藤間

邸、東京麻布の石丸邸、東京西大井の石井邸、倉敷市の江口邸、紀伊勝浦市の坂口邸などがあげられる。

結び

本研究をとおして4つの知見が得られた。

第一は前田邸にくわえて西村伊作が設計した阪神間の住宅をみてきたが、これらの建物はなぜこれまでほとんど知られることがなかったのか。その理由は二点が考えられる。一点目は前田邸を除いては水害(昭和13年)や空襲(昭和20年)などによって早い時期に現物としての建物がうしなわれており、近代建築としての再発見される以前に多くが消滅していたことが関連する。二点目は豪華さや華麗さをもった実業家の迎賓館ではなく、あくまでも生活を近代化して利便性を追求した簡素な洋館であったために、装飾などの面で特徴が見出せず記憶に残らなかったものと考えられる。

第二は西村伊作の設計ならびに建設手法の一端を解明することができた。西村伊作が描いたスケッチをもとに、建築教育を受け実務経験を有した榎本淳一が設計し、図面化し、職人を使い、建物を完成させるという手順であった。西村建築会社のあった住吉では技師長榎本淳一が主となって設計と施工を担った。大正10(1921)年から昭和12(1937)年までの17年間にわたった。もうひとりの建築技術者だった大嶋虎之助も昭和3(1928)年までは住吉で建築活動しており、この頃までは住吉が西村伊作の建築活動の最大拠点であった。

第三は大正15(1926)年に建設され、三田市に現存する前田邸の実態が把握できたことである。棟札には建設体制が記されており、和歌山県新宮周辺の大工たちによって普請が担われていたことがわかる。設計図が一式保存されており、現在は改装されて消えたが、建設当初は造り付けの椅子とテーブルからなる食事コーナーがつくられていたことがわかる。中廊下式のプランが採用されていた。注目すべきは温水暖房装置と水洗便所が備わっていた点であり、設備装置の充足度はきわめて高い。ここに生活改善を主眼とする西村伊作の理念の反映とみることができる。外観は洋風だが屋根には和風意匠にもとづく意匠が用いられていた。内部では洋室にも長押が用いられ、落ち着いた室内空間が誕生していた。

第四は西村建築会社の住吉本社屋は建築会社の事務所にくわえて、榎本淳一ならびにその家族のすまいを兼ねたものとなっていた外観はスパニッシュの影響を受けたスタイルとなり、内部は各階ともに一室のみが畳敷きの和室となっていた。木骨鉄網コンクリート構造ながら眺望を愉しむための屋上を有した。

備考:

古写真ならびにp.14の棟札写真(前田渉の撮影)以外は川島智生の撮影による。

謝辞:

前田慶治氏の遺族である奈穂氏・渉氏・和彦氏・義人氏、榎本淳一氏の遺族の向井五美氏、歴史家の山田真理子氏、茅ヶ崎博物館の皆さまの各位には現地調査、聞き取り調査、文献蒐集などで協力を得た。感謝の意を表したい。

参考文献:

- 『建築案内』西村建築株式会社.1926
- 榎本淳一著『住宅建築の手引』西村建築株式会社.1926
- 西村伊作『楽しい住家』文化生活研究会.1919
- 西村伊作『田園小住宅』警醒社書店.1920
- 西村伊作『生活を芸術として』文化生活研究会.1922
- 西村伊作『装飾の遠慮』文化生活研究会.1922
- 西村伊作『明星の家』文化生活研究会.1923
- 西村伊作『我に益あり 西村伊作自伝』紀元出版.1960
- 田中修司「西村伊作の研究」東京大学学位論文.1998
- 田中修司『西村伊作の楽しい住家: 大正デモクラシーの住い』はる書房.2001
- 『「生活」を「芸術」として 西村伊作の世界』神奈川県立近代美術館&和歌山県立近代美術館.2002
- 藤原美樹『小さくてよいもの 西村伊作の世界』三協社.2022
- 黒川創『きれいな風貌 西村伊作伝』新潮社.2011
- 『愉快な家 西村伊作の建築』INAX出版.2011
- 川島智生「近代日本住宅におけるスタイルの創出とその理念—西村伊作・貫川豊彦・ヴォーリス」『社会思想史研究』社会思想史学会.2001
- 川島智生「倉敷教会の建築的神髄」『日本基督教団倉敷教会 礼拝堂建築100周年記念事業 報告書』倉敷教会.2025